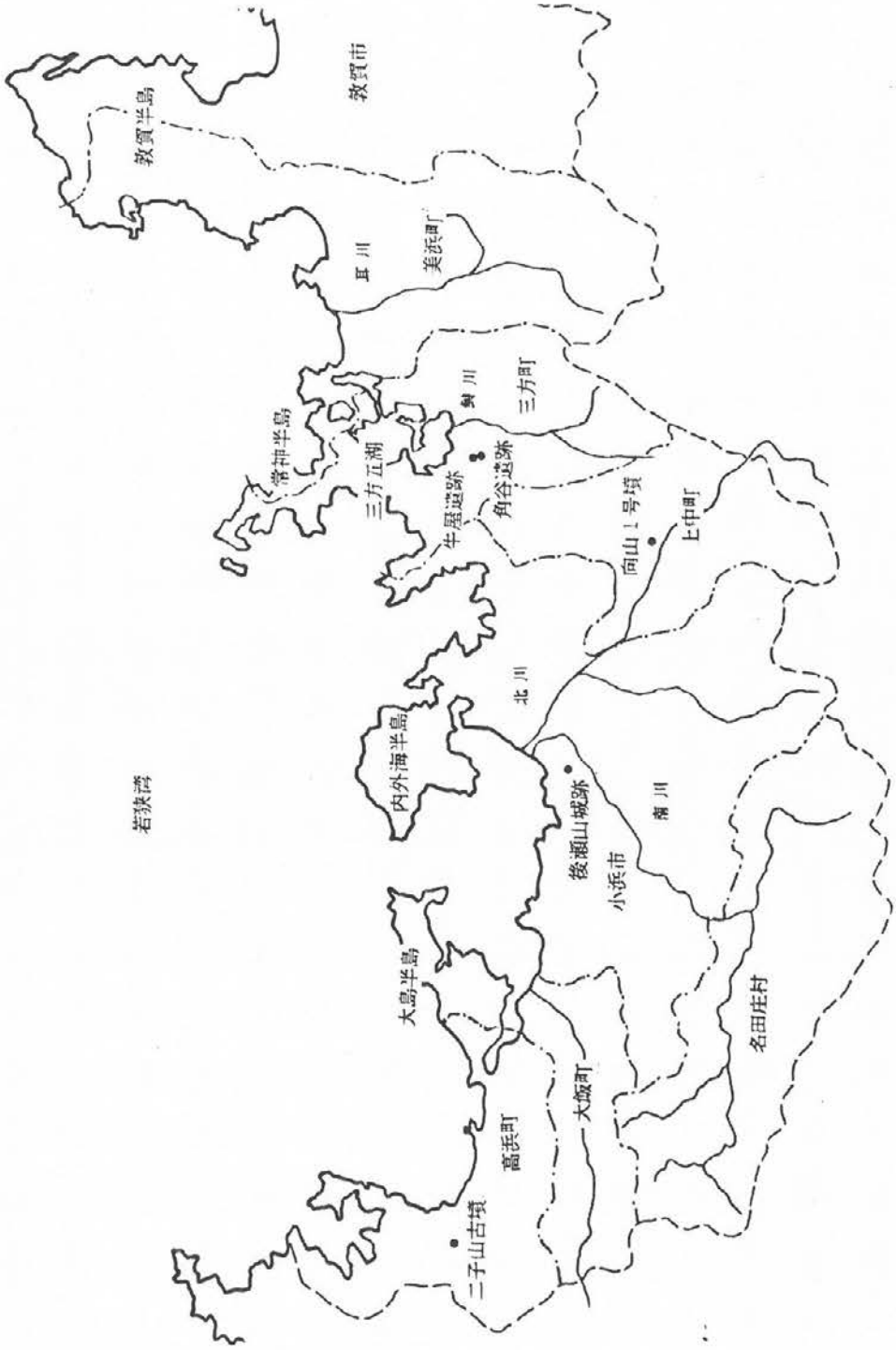
昭和６３年度第１１回郷土史講座

若狭地域の本年度発掘調査

平成１年２月２６日（日）

若 狭 歴 史 民 俗 資 料 館

本講座発表調査遺跡の位置



［講座発表内容］

1．三方町向笠 角谷遺跡・牛屋遺跡
三方町郷土資料館
田 辺 常 博 氏

2．上中町堤・下吉田 向山1号墳
上中町教育委員会
永 江 寿 夫 氏

3．高浜町小和田 二子山古墳
若狭歴史民俗資料館
網 谷 克 彦

4．小浜市伏原・後瀬山城跡
小浜市教育委員会文化課
松 川 雅 弘 氏

5．質疑応答

角谷（かどや）遺跡

所在地	三方町向笠３７号赤山
調査原因	県営圃場整備事業
調査主体	三方町教育委員会
調査担当	田辺 常博
調査期間	範囲確認調査　昭和６３年３月７日～　３月３１日
	本調査　昭和６３年５月９日～　６月３０日
	整備作業　昭和６３年７月１日～１２月２４日
調査面積	範囲確認調査　２４０㎡
	本調査　２９３㎡
時代	弥生時代後期、古墳時代前期、奈良・平安時代

調査の概要

遺跡は、鰣川流域西側の高瀬川扇状地の海抜12.0～13.0m微高地で、向笠集落東側の山沿いの水田に所在しています。遺跡周辺には、牛屋遺跡、仏浦遺跡、風神遺跡などの弥生遺跡が分布する遺跡の密集地です。

発掘調査は、昭和63年３月から６月にかけ実施され、弥生時代後期と奈良・平安期の遺物及び遺構が複合して検出されました。

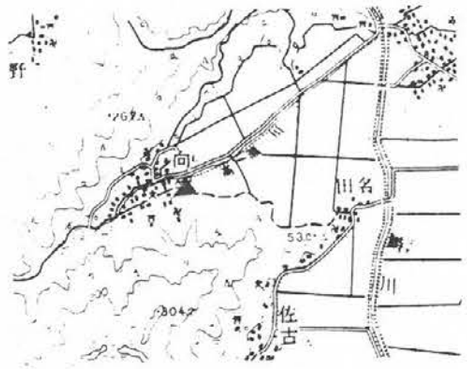
前者では、弥生時代後期の甕、壺、孔あき土器などの完形土器が投げこまれたように密集して出土する箇所及び広鍬などの農具、紡織具、容器、板材等の木製品を多量に包含する層が検出されました。なお、この部分は、当時の溝か川跡と考えられますが、残念ながら遺構としてとらえることができませんでした。

また、後者の奈良・平安期では、直径25㎝内外の柱根及び柱穴群をともなう建物遺構及び東西方向に割板、杭をほぼ2ｍ間隔に打ちこまれた柵列状遺構が検出されています。このことにより、奈良・平安期には遺跡周辺に相当規模の大きな建物があったと思われます。

出土遺物の特徴は、弥生時代後期では木製品類と土器とがセットでとらえることができ、時期関係が明確となった点にあります。この木製品の中で、紡織具の糸巻（紡織した糸を紐にするための使用した巻き取り具）、丹塗りされた楯状の板（外面のみに丹が塗られた厚みが８㎜前後の板で縦方向に1.5㎝間隔に糸孔の配列がならび、糸孔は横一列に0.5㎝間隔にあけられている。）の断片、鍬形木製品等の紡織具及び武具の出土例は県内でも余りみられません。

奈良・平安期の遺物としては、８世紀から10世紀に比定される須恵器、土師器、鉄製の刀子、木製品などが出土しています。また、文字資料として「天平四年（732年）十月廿八日」の年号が記された古代の文書木簡が須恵器、土師器の小破片、栓などの小型木製品、木くず等を包含する砂レキ質土層より出土しています。希少な資料として木製の立体人形が２点出土しています。ともに、祭などに使用されたと思われますが、内１点は上、下ともに冠をつけた男の頭部が彫刻され、上側頭部の腕の部分が穿孔され、あやつり人形のように腕がつけられていたと想定され、当時の生活の一端を知ることができます。

なお、遺跡北側の遺物包含層より東海地方を中心に分布する口縁がＳ字を呈する古墳時代初頭の薄手の大型甕が出土していますが、若狭においては初例です。

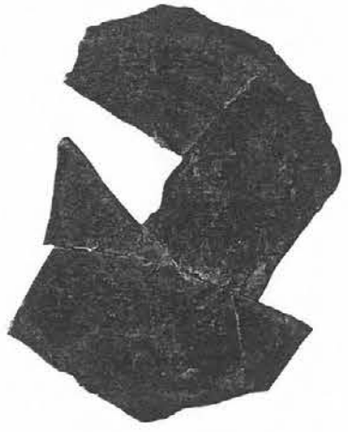


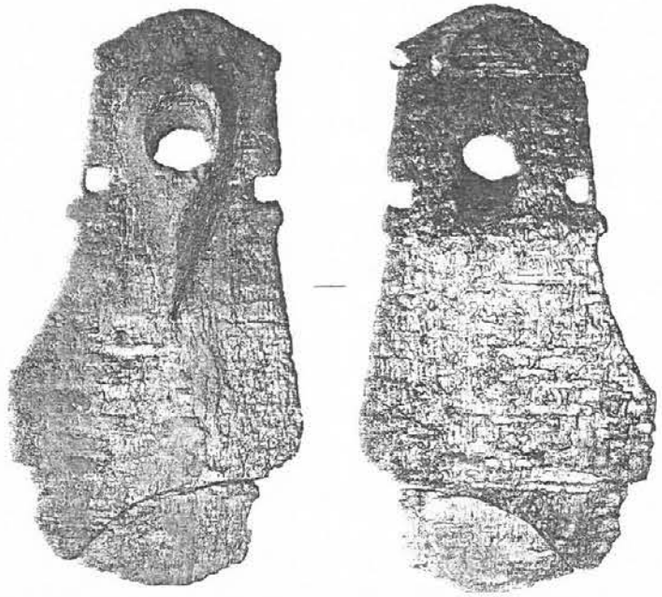
遺跡位置図

蓋形土器　弥生時代後期

鉢形土器　弥生時代後期

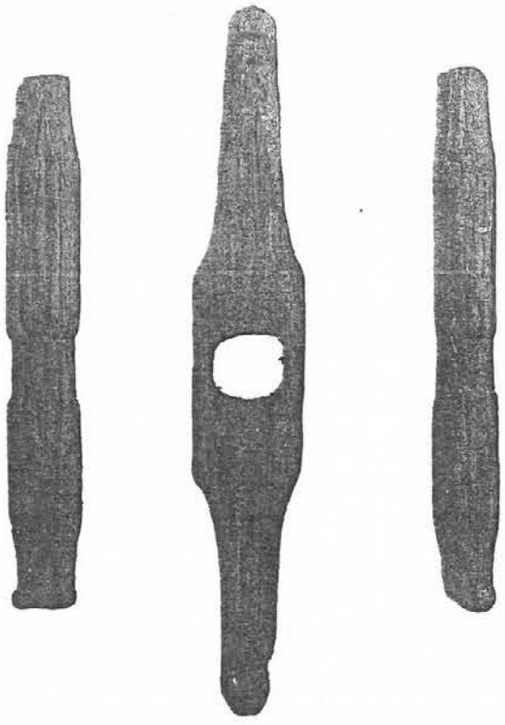
孔あき土器（鉢形）　弥生時代後期


墨書土器（須恵器杯）「秋」　平安時代



広鐸　弥生時代後期

丹塗櫛状木製品　弥生時代後期



紡織具（糸巻）　弥生時代後期

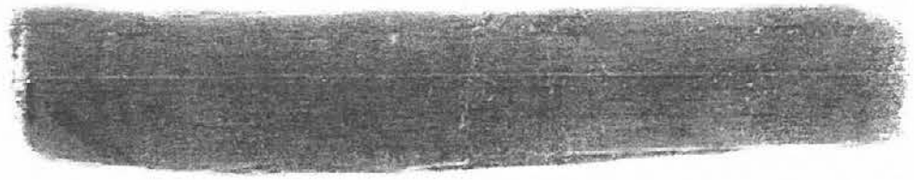
立体人形（未脚状）　奈良・平安時代

立体人形・正面（両端に頭部が彫刻され冠をかぶる）　奈良・平安時代

立体人形・側面（上側の腕部が穿孔されている）

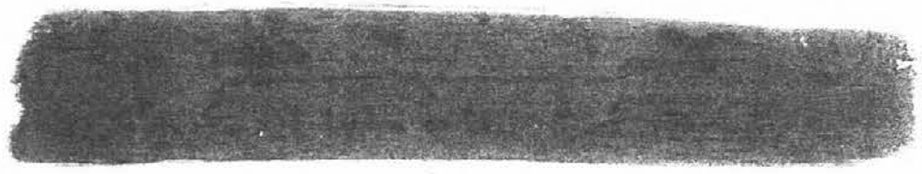
木簡（表面）　奈良時代　天平四年

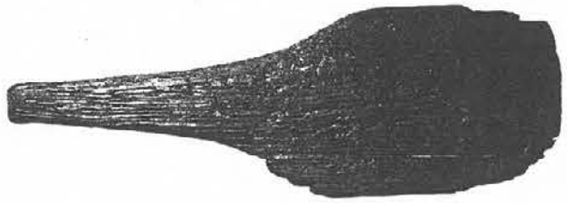
木簡釈文
「□今日　　」



木簡（裏面）

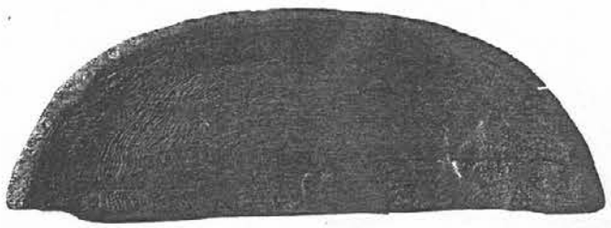
木簡釈文「〔布〕　　
天平四年十月廿八日」





鋤状木製品　弥生時代後期

盛矢容器　奈良・平安時代



鉄製刀子　奈良・平安時代

牛屋遺跡

所在地	三方町向笠８４号松山外１０字
調査原因	県営圃場整備事業
調査主体	三方町教育委員会
調査担当	田辺　常博
調査期間	昭和６３年１０月１１日～１１月９日
調査面積	１７６㎡
時代	縄文時代中期、弥生時代中期

調査の概要

［６４年度工事施工区域］

この区域は、高瀬川より北側で６４年度の圃場整備工事箇所の向笠３３号上手嶋、４９号下手嶋、５０号西の上の水田約５．８ｈａで、今年３月から６月にかけ発掘調査を行なった角谷遺跡の北側対岸で、工事内容が全面切土となるため調査を実施した。工事施工区域全体に調査溝（２．０×４．０ｍ）を１１箇所設定し、調査をすすめたが全体的に耕土面以下高瀬川扇状地の砂レキ土層、粘性の強い粘土層の堆積が厚くみられた。このため流れこみによる磨滅した須恵器、土師器が少量出土したが遺物包含層としての検出までに至らなかった。

［６５年度工事施工区域］

この区域は、６４年度工事施工区域東側の水田で向笠４８号松ノ木、５４号松ノ下、５５号江振、５６号タテ寺田、５７号横寺田、７６号上横田、７７号菱津、７８号小カヤ、７９号常ケ谷、８４号松山、８７号下坂の１１字に渡る。

ここは、５５号江振の山鼻より東側は山沿いに内湾し、奥まったところで沼沢地だったと考えられる強湿田の水田が点在している。今回この内、現在休耕地で山沿いの水田に調査溝（２．０×４．０ｍ）を１１個設定し調査を行った。

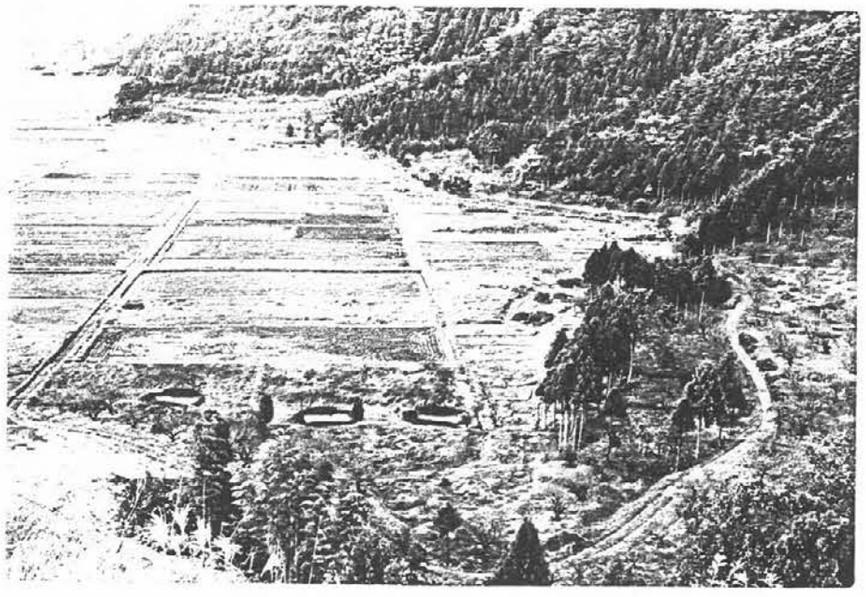
Ｈ－６３トレンチは、耕土以下低湿地特有の木の葉、草根が堆積する泥炭層が１メートル以上にわたりみられた。この泥炭層より、横たわった自然木の広葉樹が検出されたが、土器等の出土はみられなかった。

Ｊ－７４、７５トレンチは、２０㎝程の耕土下の２層小砂利を混在する泥炭を含む有機物土層及び３層角礫を含む粗砂層より、縄文時代中期に属する土器などが出土している。土器片等が出土する包含層は耕土よりすぐ下で小砂利、砂を含んいるでいるところから流れこみと考えられるが、背後の８１号北松山の山側谷すじには畑及び梅園がみられ、ここに当時の住居跡などの遺構面が残っていると思われる。

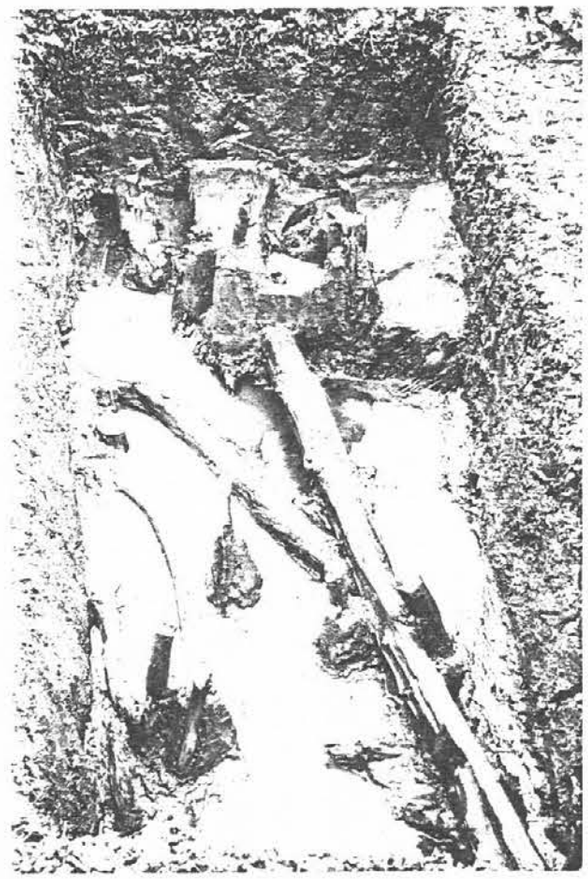
Ｉ－９２、９３－①、９３－②、Ｊ－８６、８８、８９トレンチの設定した箇所は一番内湾し奥まったところの水田で、昭和３０年代後半に実施された第１次圃場整備の際に櫂等の木製品出土している。

Ｉ－９２、９３－①、Ｉ－９３－②トレンチは、耕土面から強湿田のため泥炭質の土層を呈し、以下１．０ｍ以上にわたり草本質、木本質の泥炭層がシルト層を互層し堆積している。上層からは、弥生時代中期に層する土器片が少量出土しているが、表土より７０㎝程下の木本質の泥炭層からは、当時森林だったと想定される杉の根木が埋没した形で検出され、良好な自然遺体として残っている。

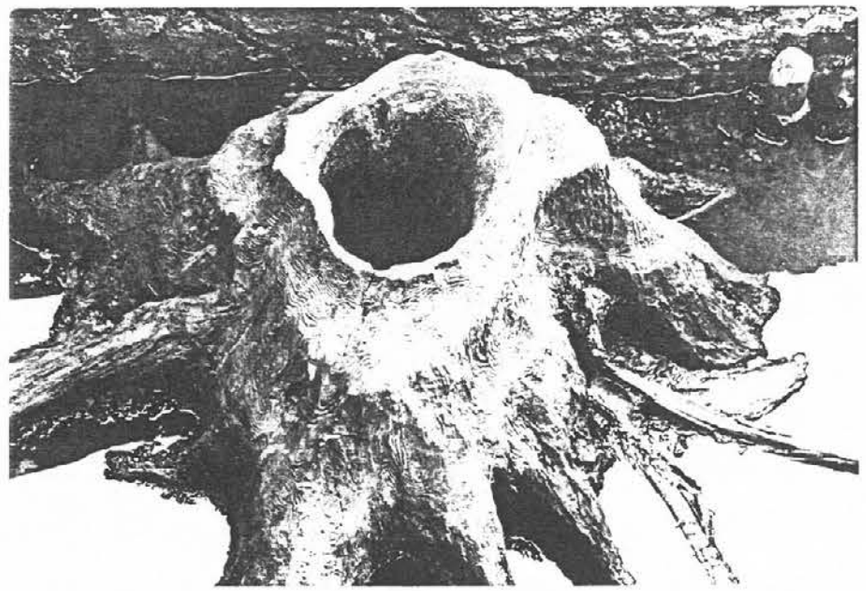
Ｊ－８６、８８、８９トレンチの背後には、谷すじの梅園が小規模に広がっているが、このため２０㎝程の耕土下の２層には小砂利が混在し、谷から運ばれた土砂の影響が考えられた。この耕土より下の２０㎝から１．０ｍにかけての２～４層にかけての泥炭質の土層には、弥生時代中期の土器を主体とする土器片が多く出土している。Ｊ－８９トレンチからは、若狭地方では初めて発掘で石庖丁及び竪杵状のミニチュアー木製品が出土している。Ｊ－８６、８８トレンチの下層の木本質泥炭層からは、直径２０㎝程の杉丸太が東西に倒され、これをはさむように杭が打ちこまれた用途不明の遺構及び芯の部分が空洞化した杉の株が検出され、埋没林の形跡を残している。　このことにより、背後の８３号牛屋などの梅園には、弥生時代中期を主体とする住居跡などの遺構面が残っていると考えられ、前面に広がる水田には２，０００年程前の弥生時代中期頃の水田遺構面が残っているとも考えらる。



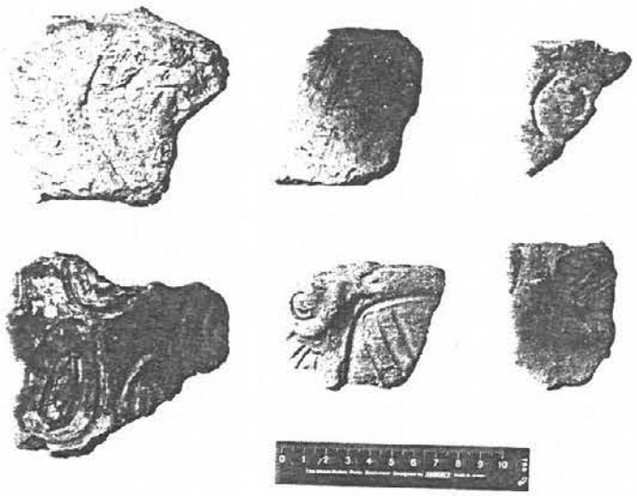
—11—



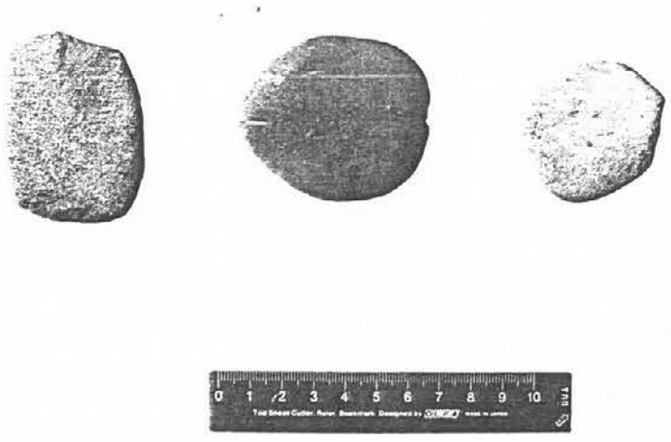
杭が打ちこまれた用途不明の遺構



空洞化した杉の株



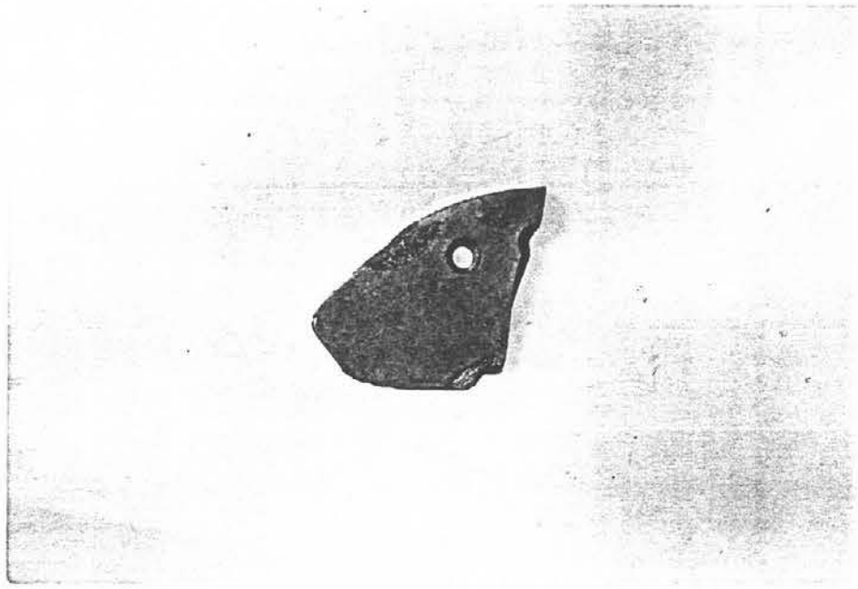
縄文時代中期土器



石斧・石錘（縄文時代中期）

弥生時代中期土器

弥生時代中期土器



石庖丁

竪杵状のミニチュアー木製品

向山古墳群発掘調査

上中町教育委員会．永江寿夫

所 在 地：遠敷郡上中町堤・下吉田

調査契機：山上にある古墳の山裾を土取りしたため、その後の自然崩壊により墳丘が消失する恐れがでてきたため緊急の発掘調査となる

技術援助：若狭歴史民俗資料館・福井県埋蔵文化財センター

調査主体：上中町教育委員会

調査期間：昭和６２年・６３年度の２ケ年

調査目的：昭和６２年度…墳形の確認・外表施設の確認
　　昭和６３年度…埋葬施設の調査

調査結果

１．昭和６２年度１次調査

向山古墳群測量調査

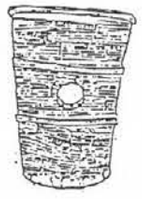
前方後円墳（１号墳）．方墳１基（３号墳）．円墳７基

向山１号墳の墳丘確認調査

規　　模：全　長４８．６ｍ　後円部幅３０．６ｍ
　　前方部幅２７．４ｍ　くびれ部幅１９．４ｍ

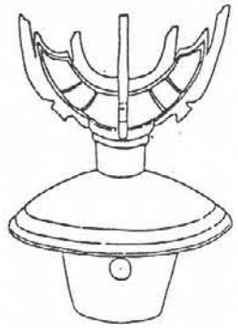
形　　態：２段築成　地山削りだし（一部盛り土）

外表施設：葺石（上段；河原石一北川や鳥羽川のもの
　　下段；山　石一上段のものより大きい）



円筒埴輪列＊墳丘上下段間の平坦面と墳頂部に心々約５０㎝間隔で須恵質と土師質の埴輪あり（朝顔形円筒埴輪を含む）
　　○Ｂ種ヨコハケ（断続的ヨコハケ）
　　○川西編年第Ⅳ期

くびれ部台状施設＊墳丘とは溝で区画されている
　　＊祭祀場所と思われる
　　＊須恵器と土師器はほとんどこの場所から出土した。
　　（須恵器は器台、甕、杯蓋、壺でＴＫ２０８型式の



5世紀中葉～後半代のもの。）

形象埴輪・蓋形埴輪が前方部で出土
県内では松岡町手繰ケ城山古墳、
丸岡町六呂瀬山３号墳に続き３例目
若狭では初の出土
・家形埴輪（破片）がくびれ部で出土

２．昭和６３年度２次調査

向山１号墳の埋葬施設の調査

後円部：横穴式石室　前方部に向かって開口する

墓壙プラン全形；羽子板状
全長７．７ｍ

玄室：壁体下半（約６０㎝の高さ）は岩盤を利用し、途中から山石（チャート）の割石を用いて積む。前壁を除く３壁は上の石ほど内側にせりだす持ち送りをしている。床面は玉砂利を敷き詰める。

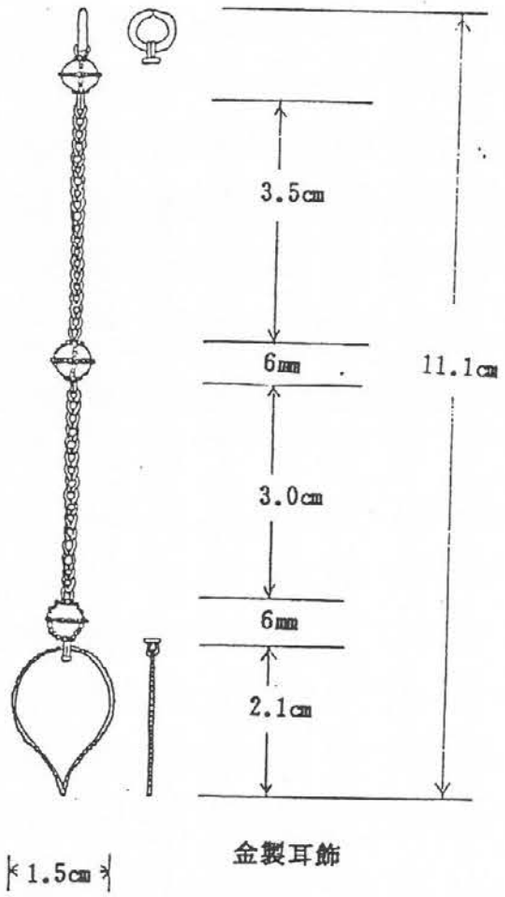
玄門：板石横立（かまち石）＋両袖石＋まぐさ石＋閉塞石

羨道：岩盤素掘（側壁や天井石なし）床面は段状の玄門に向かって緩やかに傾斜

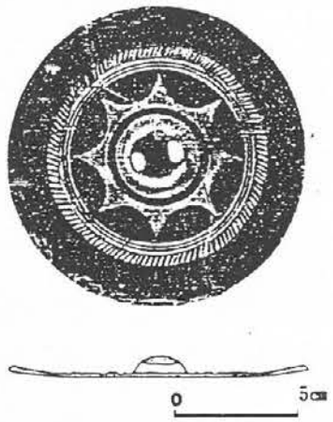
規模：玄室長３６０㎝　奥壁幅２３０㎝　前壁幅１８０㎝（台形状）
石室推定高１７０㎝
羨道部長３３２㎝　幅１２４㎝

副葬品：

＊金製垂飾付耳飾　１点
全国で４７例の発見　５世紀後半代のものは全国で１５例あり１例は西塚古墳のもの



金製耳飾



仿製内行花文鏡実測図

＊鏡２面
仿製内行花文鏡（径１２．２㎝）
仿製鋸歯文鏡　（径９．１㎝）

＊短甲２領　三角板革綴短甲

＊刀７本　剣４本　鉾３本　槍１本

＊鏃　長頸鏃２束（約３０本）
平根鏃１点

＊刀子　４点

＊盾隅金具　４点（盾１枚分）

＊玉類　金銅製三輪玉　１点
勾玉　めのう製　碧玉製
各２点
管玉　１８点
こはく玉　多数
ガラス玉　多数
総数約２００点

＊竪櫛　約３０点

前方部：武器埋納壙　形態：床面は後円部に向かって傾斜し地山を２段に掘り込む

規模：長さ３．９ｍ　幅１．１ｍ、深さ０．３５ｍ

埋納物：＊短甲１領　長方板革綴短甲
＊刀　９本
＊鉾　２本
＊槍　１本
＊銀製金具１点

向山３号墳の調査

墳　　形：方墳　　規模：１０．５ｍ×１２ｍ

外表施設：葺石なし　埴輪なし

埋葬施設：４．０ｍ×１．４ｍ×０．７ｍの墓壙に配石をもつ木棺直葬墳

副 葬 品：盗掘されていて　その盗掘壙の攪乱土より須恵器や土師器の破片が出土した

築造時期：須恵器の型式（ＴＫ２０８）から１号墳と同時期と思われる　　１号墳の陪塚か

○向山古墳は円筒埴輪の考察からすれば、上中町脇袋の西塚古墳よりもやや古いと判断できる。よって当然のこととして竪穴式石室が予想されていた。が実際は前方部に開口する初期横穴式石室であった。横穴式石室は４世紀後半代に大陸（漢江流域百済）朝鮮よりまず北部九州の玄海灘沿岸地域で受容されだした。本州では和歌山県陵山古墳、岡山県千足古墳、大阪府藤の森古墳　塔塚古墳、三重県おじょか古墳、愛知県穴観音古墳などが５世紀代のものとされてきた。

しかし出土遺物のうち一番年代決定の真実性が高いとされている須恵器で年代がおさえられたのは今回の向山古墳の調査が初めてであった。（出土した須恵器はＴＫ２０８型式５世紀中葉～後半代のものとされている。）

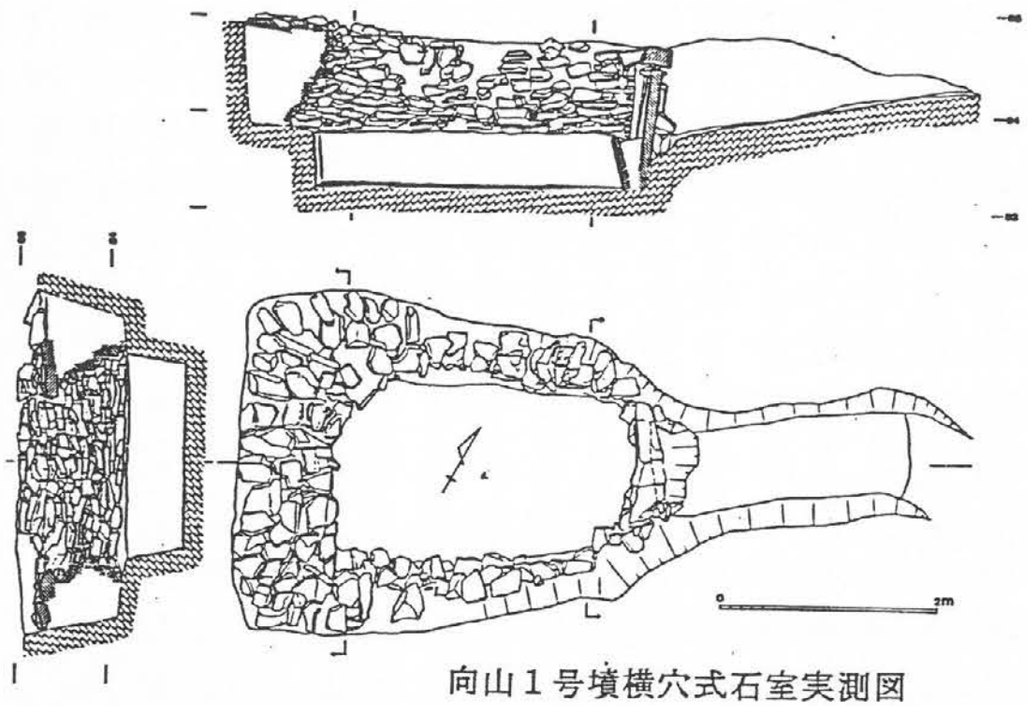
この点でも考古学上貴重な調査であったと言える。

いずれにしても横穴式石室が吉備や畿内の巨大古墳に採用されない時期から紀伊、志摩、三河そして若狭など九州や朝鮮半島と密接に関係のあった一部の地域や特定の被葬者の墓室として受容されはじめたのである。

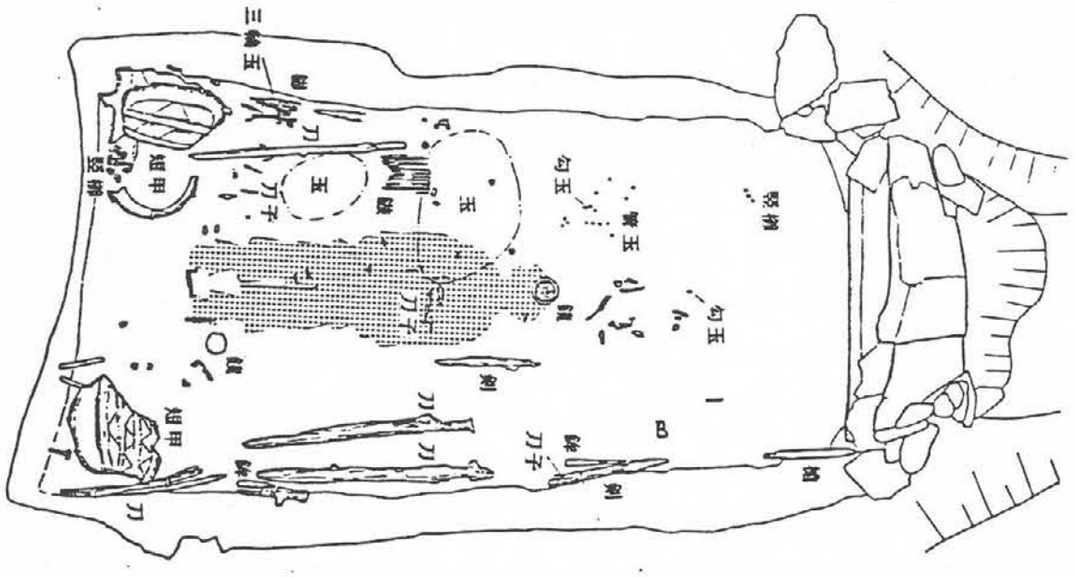
そこで向山古墳の被葬者を「先代旧事本紀」記載の若狭の国造膳臣一族に比定するならば、朝鮮半島製の可能性の高い金製垂飾付耳飾の出土と豊富な武器武具の出土は、「日本書紀」で述べられているように、大和王権のもと新羅救援などのため実際に膳氏が朝鮮へ出兵したという可能性を更に高めたとも言えるであろう。

また調査を終えて再び西塚古墳や十善の森古墳の石室内の調査検討が必要になったと思われる。

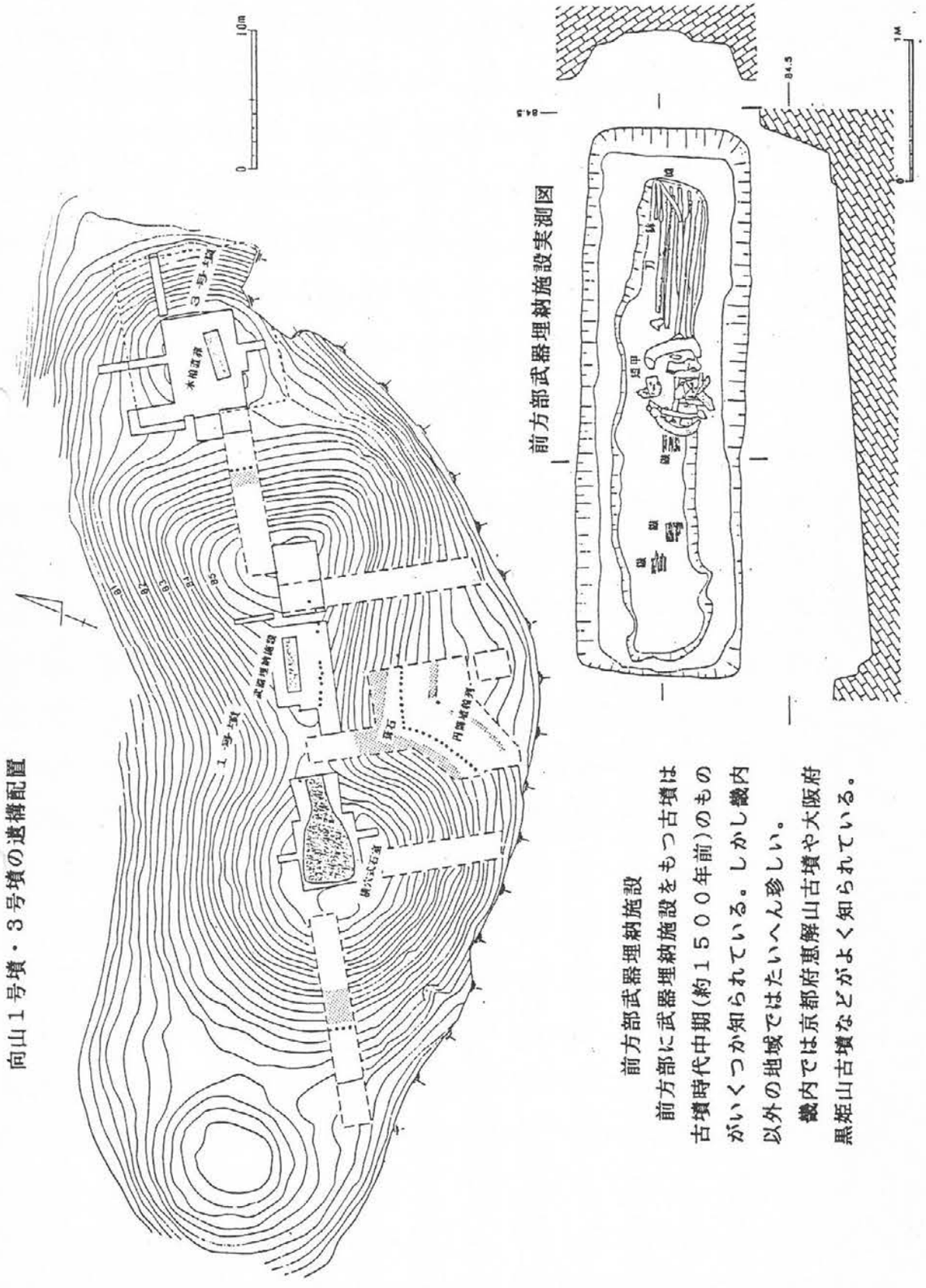
とにかく古墳の調査例の少ない若狭の古墳時代を解明するうえで実に重要な調査であったのである。



向山１号墳横穴式石室実測図



副葬品出土状況



二子山古墳

所 在 地：福井県高浜町小和田

調査原因：開発行為によって破壊の危険が生じたための緊急事前調査

調査目的：遺跡の範囲・規模・性格

調査主体：高浜町教育委員会

調査担当：若狭歴史民俗資料館（福井県埋蔵文化財調査センター）

調査期間：昭和63年10月19日～12月3日

調査面積：９０㎡

時　　代：古墳時代中期末～後期初

［調査の概要］

１）墳丘測量調査　３０×６０ｍ　前方後円墳

２）墳形確認調査　前方後円墳の前後や側面にトレンチ設定

全長２６．８ｍ　後円部形１８．７ｍ

前方部幅・くびれ部幅不明（明らかな傾斜変換点なし）

一段築成

地山削り出しで概形を造ったうえで墳丘上層を盛土

＜後円部トレンチ―Ａトレンチの所見＞

横穴式石室羨道部を検出

後円部後方に開口

側壁石積み、天井石なし

閉塞石（割石積み）完存

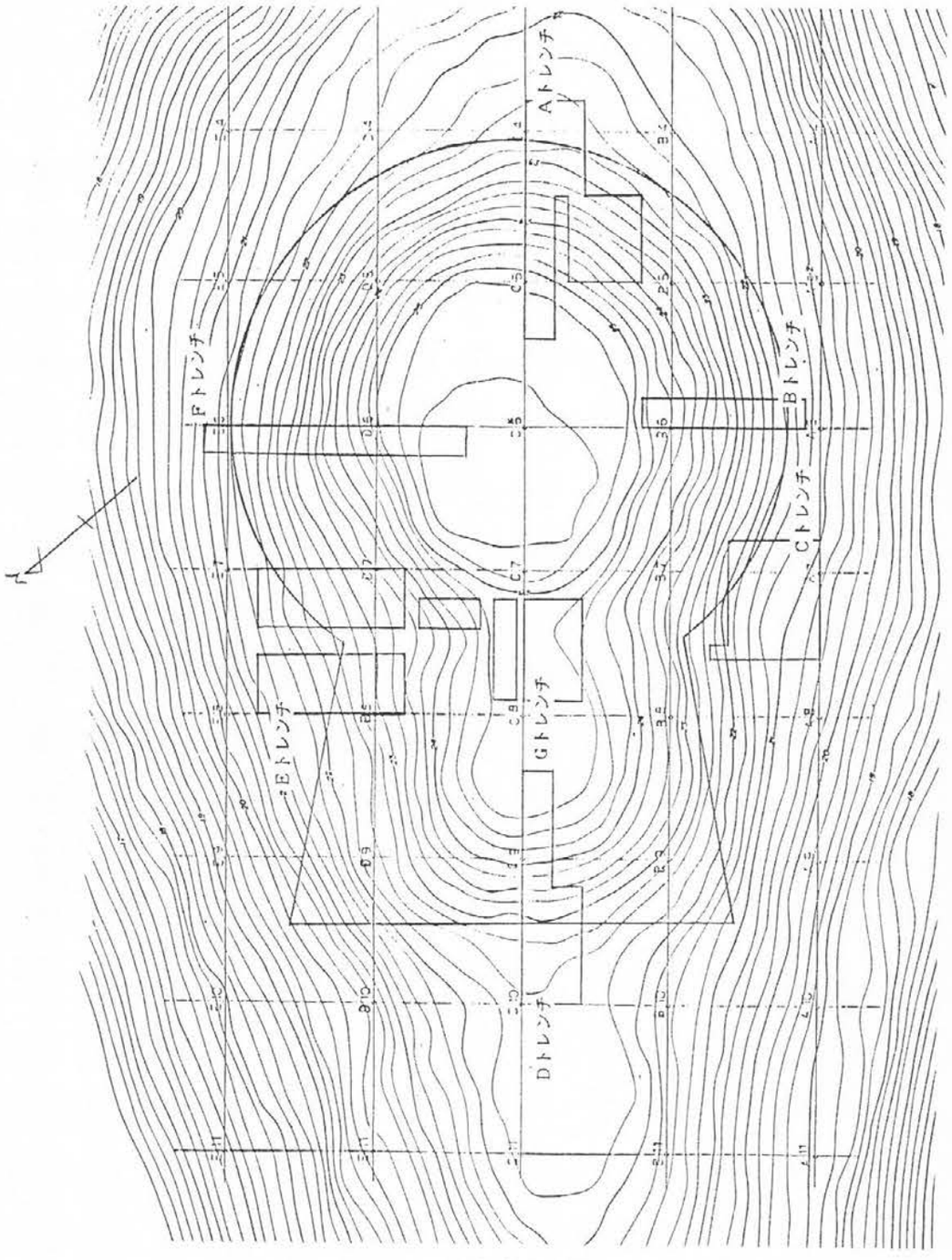
＜遺物＞

須恵器杯蓋（くびれ部墳丘斜面）ＴＫ２３・４７型式

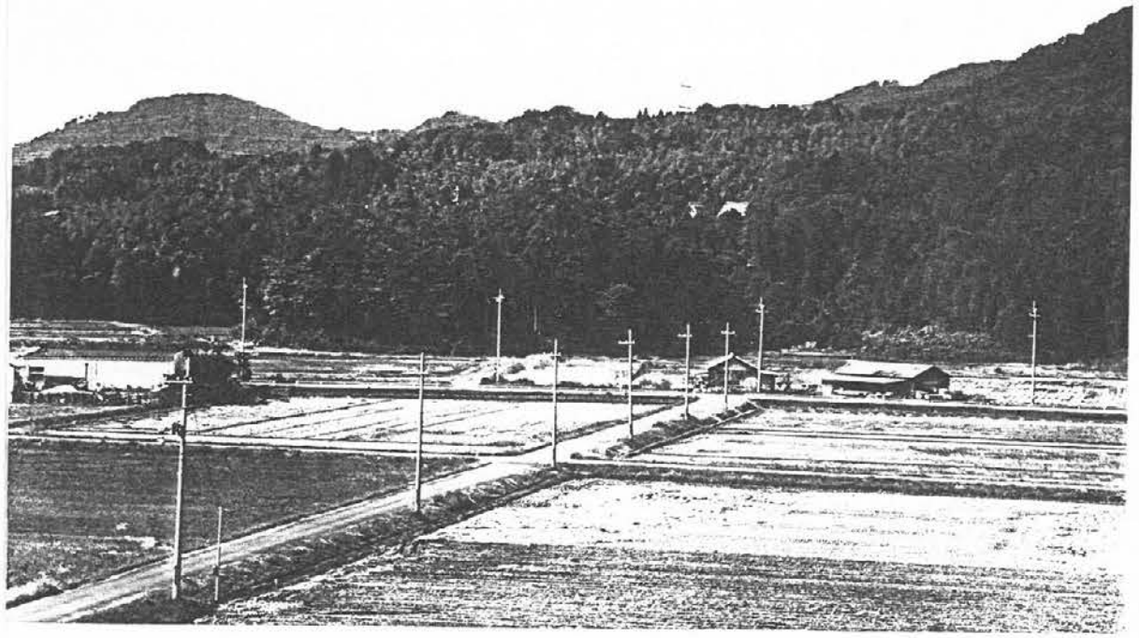
５世紀末

〃　甕　（後円部墳頂）

３）調査成果　遅くとも５世紀末には築造された前方後円墳と思われ、横穴式石室としては西日本でもきわめて古く、若狭では上中町向山１号墳に後続するものである。現在確認されている限り、大飯郡内唯一の前方後円墳であり、その出現その他きわめて重要な古墳である。

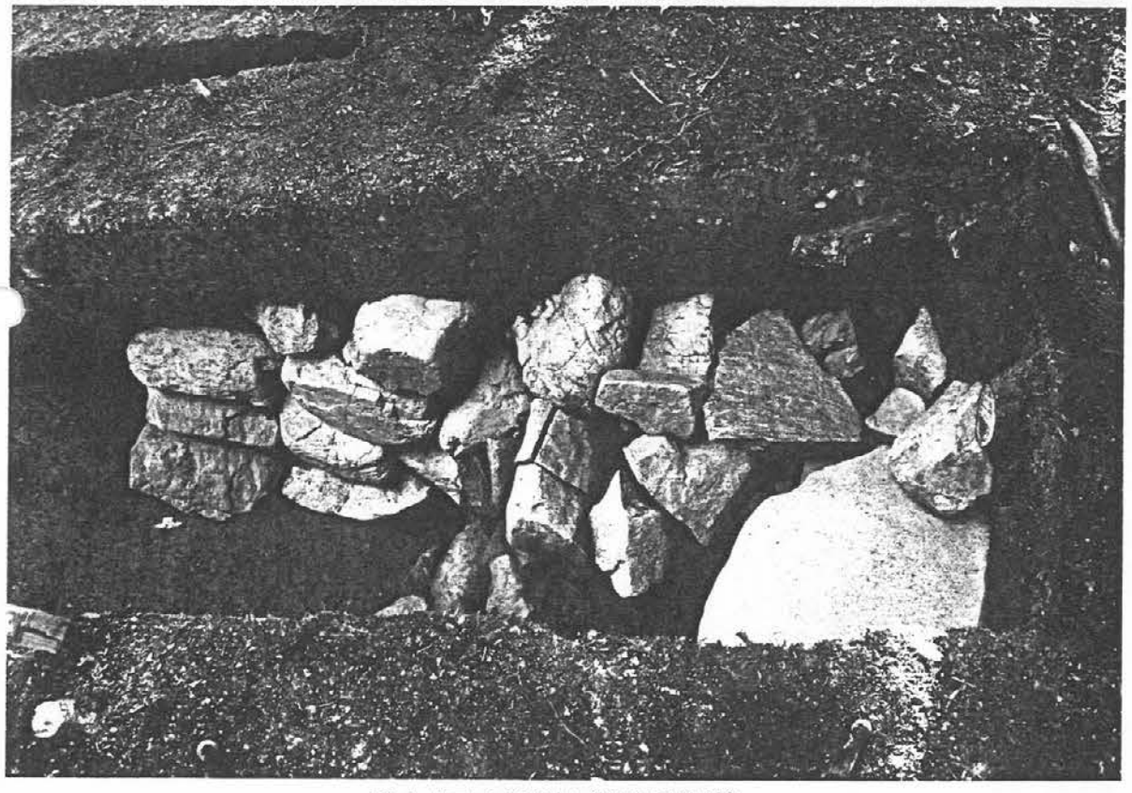


二子山古墳墳形想定図



二子山古墳遠景

後円部より前方部を望む



横穴式石室羨道部（後円部後端）

後瀬山城跡発掘調査報告

小浜市教育委員会 文化課　松川 雅弘

遺　跡　名　後 瀬 山 城 跡
所　在　地　福井県　小浜市　伏原
調 査 原 因　植林による遺構破壊のため
調 査 期 間・　昭和62年度：測量調査
　調 査 目 的　昭和63年5月24日～昭和63年7月18日：郭の発掘調査
調 査 主 体　小浜市教育委員会
調査担当者　網谷 克彦（若狭歴史民俗資料館）、松川 雅弘（小浜市）
調 査 面 積　２５０㎡
時　　代　中 世 末 期　１５２２～１６０１年

《調査の概要》

昭和６２年度測量調査

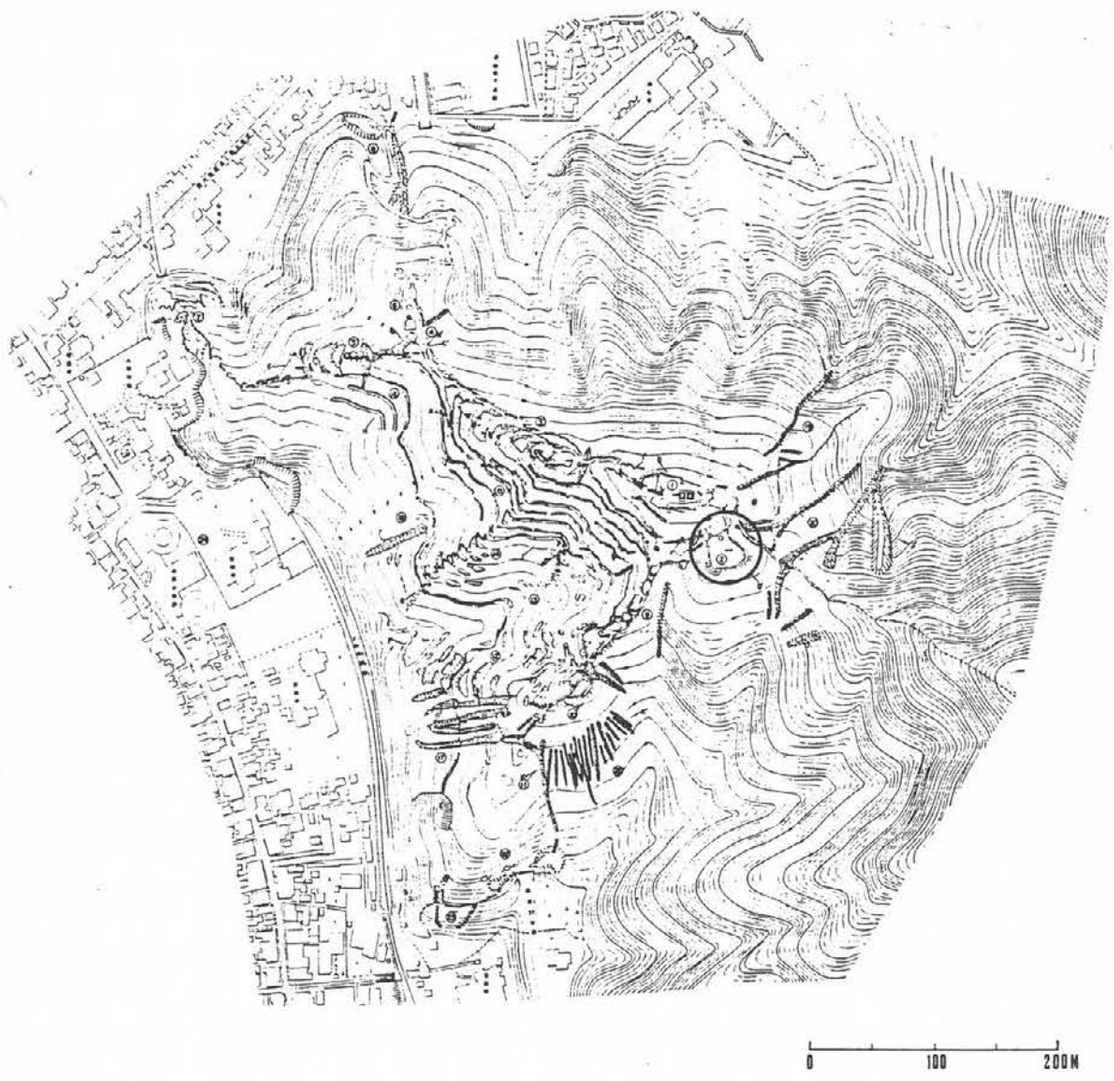
1　遺跡の立地　小浜市街地の南方に位置する後瀬山全山に存在。標高約１６０ｍの山頂に主郭を持ち、本山西麓に館を伴っていた（現在の空印寺・小浜小学校）。丹後街道の要衝にあり、東の平野部、北の小浜湾を一望できる。

2　城郭の構造　**郭**　主郭とそれに伴う二ノ丸的な郭（通称、千畳敷）を中心に、それぞれの尾根上に郭を持つ。

堀　竪堀と畝堀に大別される。竪堀は、長さ約６０ｍ×幅約１０ｍ前後であり、３０本確認されている。主に後瀬山城では、北側斜面に大規模な竪堀がみられる。また畝堀は西側斜面に長さ約４０ｍ×幅約４ｍ前後で、１８条の畝状になっているのが確認されている。

土橋　尾根を横断する竪堀に橋のように付けられた通路。長さ数ｍ×幅０．５ｍ程度の規模で存在する。後瀬山城では、最長５ｍの土橋が確認されている。

土塁　郭の平坦部端に設ける堤防状の防禦施設。後瀬山城では高さ０．５～２ｍ前後のものが確認されている。



後瀬山城跡（武田城址）

昭和６３年度発掘調査（②郭の調査）

１ 検出遺構　礎石を有する建造物

８間（１６ｍ）×４間（８ｍ）、半間ごとに束柱に用いたと思われる小振りの礎石を有する。礎石数６１個、中心の礎石が最も大きく長径６０㎝×短径３５㎝である。自然石をそのまま用いている。

玄関遺構

板状の自然石を用いて、礎石群の東南部中央に製作している。長辺３ｍ×短辺１．５ｍであり、２期に渡って製作されている。

第１期は比較的小さい石を密に敷いているが、第２期はひとまわり大きな石を粗く敷いている。

築山遺構

土塁の一部を利用し、周囲の土塁より約５０㎝程高くしている。郭の内側である北面は、最下部に長径１００㎝×短径５０㎝程度の石を基礎として、長径３０㎝×短径２０㎝程度の石が積まれている。その裏込め石として１０㎝角の石が、築山と思われる部分の頂部まで、部分的ではあるが積まれている。

土塁

郭の南東部にのみに存在する。高さ５０㎝前後の土塁であるが、ただ単に平坦部にそのまま土を盛ったのではなく、山頂部を削って出た土を使って周囲に平坦面を拡大し、更にその上に土塁を構築している。また、１期で造り上げたのではなく、２期に渡って造っており、土塁の上面から約３０㎝の所で１期の上面と思われる面が出ている。

２ 検出遺物

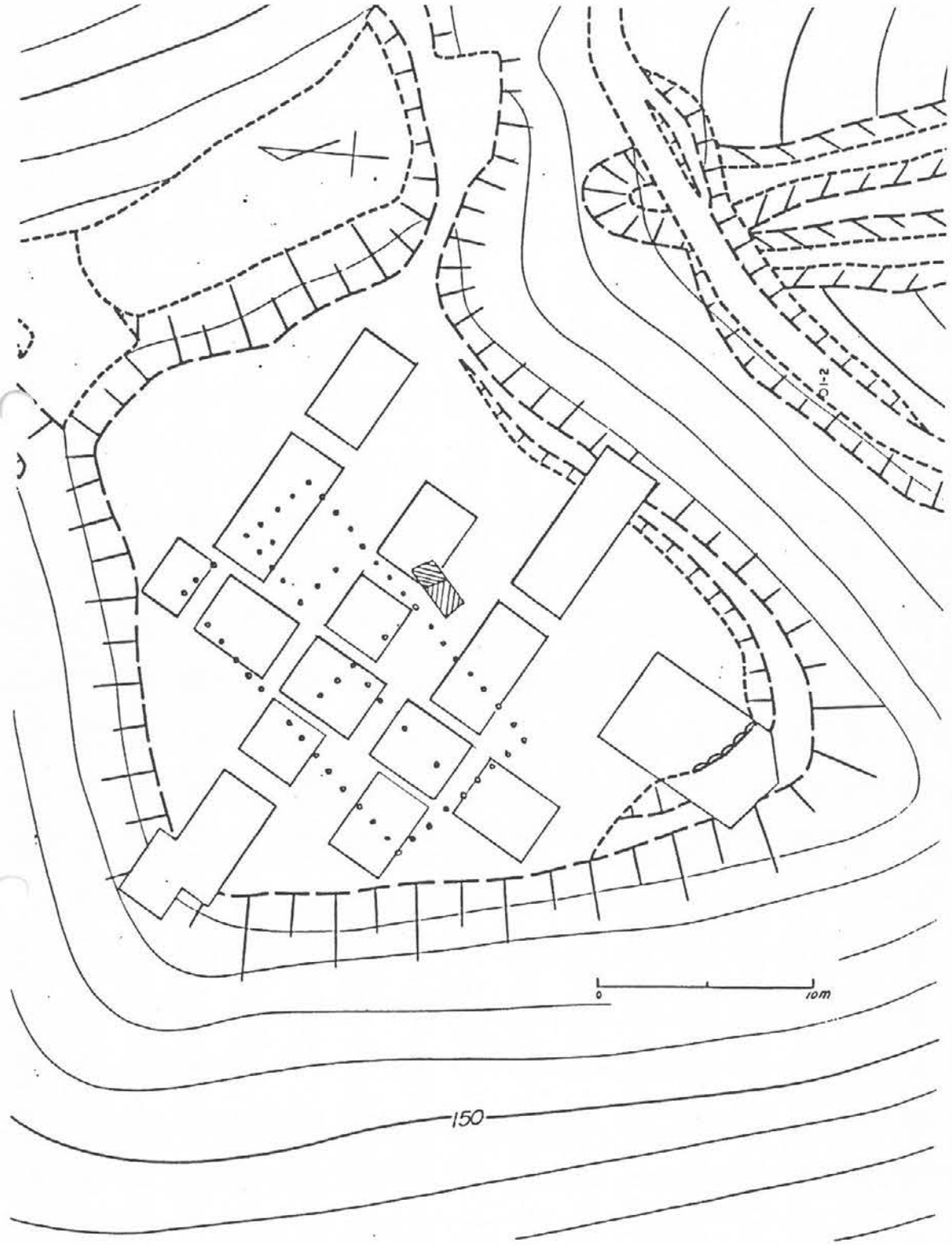
磁器

青磁　碗・盤の口縁部

白磁　皿の口縁部や底部

朝鮮製陶器

底部のみであるが、径約２０㎝の通称「船徳利」といわれる器形の陶器である。



瀬戸・美濃焼

鉄　釉　茶入れ・天目茶碗の破片。

灰　釉　皿などの口縁部の破片。

そ　の　他

香　炉　底部のみが検出された。脚の成形は指で摘んだようにしている。

火　桶　ほぼ完形近くまで復元できる。

瓦　　数十片検出されているが、殆どが平瓦で、年代の決定はできない。瓦の「表」(凹面)はハケ目もみられ調整しているが、「裏」(凸面)は非常に簡略化され、殆ど調整を加えていない。丸瓦については一個体が復元できる。その「表」(凸面)の一部には、縄目叩き目が残っている。また「裏」(凹面)には、布目が残っている。

《考　察》　②郭とそこの建物は、土塁の検出や玄関遺構の検出により、当初のままではなく、途中に一度改修されている事がわかった。方法としては、土塁を高く、玄関遺構は、それまでよりも大きな石を敷く方法を取っている。修築時期は不明であるが、一つの見解としては、天正１０年（１５８２）北陸道警備のための、後瀬山再防備があげられる。

②郭の遺物は、武具・武器ではなく、香炉・茶入れや天目茶碗などが検出されている。遺構としても、築山状の構造物が検出されており、この郭の平時に限定すれば、文化的な性格がみうけらる。

若狭武田氏の沿革

若狭武田氏と後瀬山城	主な出来事
永享１２年（１４４０）「大和の陣」で功績をあげた安芸守護武田信栄が若狭国守護となる。一色氏の残党が領内で叛乱を起こし、信栄が殺害される。	
嘉吉 元 年（１４４１）武田信賢が若狭国守護になる。一色氏の残党や、信賢の支配に対する不満分子が、絶えず領内で叛乱を起こす。	嘉吉 元 年（１４４１）嘉吉の乱が起こる。
応仁 元 年（１４６７）「応仁の乱」が起こり武田信賢・国信は東軍に属する。	同年５月 応仁の乱が起こり日本中を巻き込んだ戦となる。
応仁 ２ 年（１４６８）武田信賢が西軍一色氏の所領丹後国守護に任ぜられる。	文明 ３ 年（１４７１）朝倉孝景が西軍から東軍に寝返る。
文明 ６ 年（１４７４）武田国信が若狭国守護となる。一色義春に旧領丹後を返せと、将軍（足利義政）より命ぜられるが、それに応ぜず。丹後で一色氏と戦闘をする。	同年４月 東・西の和議成立（戦乱は終結せず） 文明１４年（１４８２）将軍義政、銀閣を造営。 長享 元 年（１４８７）加賀に一向一揆が起こる。
延徳 ２ 年（１４９０）武田元信が若狭国守護となる。	
永正 ３ 年（１５０７）武田元信が幕府の了承の下、丹後へ出陣する。	
大永 元 年（１５２１）武田元光が若狭国守護となる。	
大永 ２ 年（１５２２）武田元光が後瀬山城を築城。同時に、西麓の日蓮宗長源寺を現在の位置に移転させて、武田氏の館を構える。	
天文 ７ 年（１５３８）２月 淡屋元隆・武田信孝が、反乱を起こして、名田庄より小浜に攻め込む。谷田部で合戦をおこない敗退する。	

若狭武田氏と後瀬山城	主な出来事
天文 ７ 年（１５３８）11月武田信孝が、朝倉勢の力を得て若狭攻めを計画する。この頃より、領内で反乱が勃発する。武田信豊が若狭国守護となる。	天文１２年（１５４３）鉄砲伝来
弘治 ２ 年（１５５６）信豊と息子の義統が領主争い。をする。	弘治 元 年（１５５７）川中島の戦い
永禄 ４ 年（１５６１）武田義統が若狭国守護となる。	永禄 ３ 年（１５６０）桶狭間の戦い
永禄 ９ 年（１５６６）義統と息子の元明が領主争い。若狭では相変らず不穏な空気があり、武田氏を頼ってきた将軍義昭は、朝倉氏を頼る事となる。	永禄 ８ 年（１５６５）足利義輝暗殺される。足利義昭が将軍になる。依然として将軍家の内紛が続く。
永禄１０年（１５６７）武田元明が若狭国守護となる。	
永禄１１年（１５６８）朝倉氏が若狭に攻め入る。元明は防戦むなしく後瀬山城に逃れる。しかし、そこでの戦闘はなく元明は降伏し朝倉氏に拉致される。	
天正 元 年（１５７３）丹羽長秀が若狭国の実質的国主となる。	天正 元 年（１５７３）室町幕府滅亡
天正１０年（１５８２）武田元明が江州貝津で生害。後瀬山城を再防備し、秀吉方、北陸道警備の拠点とする。	天正１０年（１５８２）本能寺の変 太閤検地はじまる。
天正１５年（１５８７）浅野長吉が若狭国の国主となる。	天正１３年（１５８５）秀吉関白に 天正１６年（１５８８）刀狩を発令
文禄 ２ 年（１５９３）木下勝俊が若狭国主になる。	慶長 ３ 年（１５９８）秀吉死去
慶長 ５ 年（１６００）京極高次が若狭国主になる。	慶長 ５ 年（１６００）関ヶ原の戦い
慶長 ６ 年（１６０１）後瀬山城を廃城にして小浜城を築く。	

西塚古墳出土金製耳飾